

幼稚園・低学年における美術鑑賞学習の有効性に関する実証的研究 —発達段階に応じた鑑賞力の育成—

【研究の背景と問題意識】

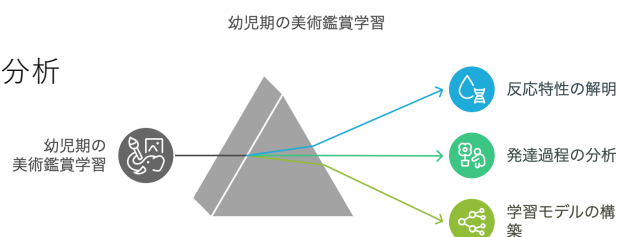
美術鑑賞学習は現行の学習指導要領において、小学校低学年では美術作品が鑑賞の対象として位置づけられておらず、幼稚園教育要領においても明確な言及がない。しかし、幼児期からの豊かな美術鑑賞体験は、感性や想像力の育成において重要な意味を持つと考え

られる。本研究では、幼稚園児や低学年児童が美術作品とどのように向き合い、何を感じ取るのかを丁寧に観察・分析することで、早期からの美術鑑賞学習の可能性を探る。



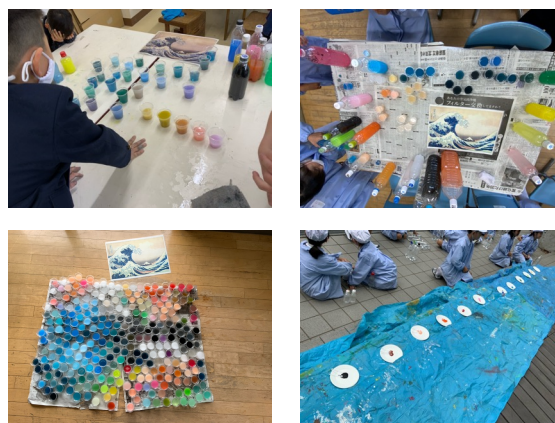
【研究の目的】

- ・ 幼児期の美術鑑賞における反応特性の解明
- ・ 幼小接続期における美術鑑賞能力の発達過程の分析
- ・ 幼稚園・低学年における鑑賞学習モデルの構築



【研究の方法】

1. 実践研究フィールド
 - ・ 大阪市内私立幼稚園2園（年長児クラス）
 - ・ 大阪教育大学附属池田小学校（1・2年生）
2. 実践内容
 - ・ 《神奈川冲浪裏》を主教材とした鑑賞活動
 - ・ 対話型鑑賞法を基本とした実践
 - ・ 活動の様子をビデオ記録・発話記録として収集
 - ・ 描画や造形活動との連携による表現活動
3. 分析方法
 - ・ 幼児の発話・反応の質的分析
 - ・ 幼稚園と小学校低学年の比較分析
 - ・ 発達段階による特徴の抽出



【研究の特色】 附属小学校での実践研究と私立幼稚園2園での実践を組み合わせることで、異なる教育環境における幼小接続期の美術鑑賞学習の可能性を多角的に検証できる。特に、附属小学校における研究実践の蓄積を活かしつつ、幼稚園における新たな実践の可能性を探ることで、より包括的な研究成果が期待できる。

この研究を通して、幼児期からの美術鑑賞教育の意義と可能性を実証的に示し、幼小を通した体系的な鑑賞教育の実現を目指す。